

各関係機関長 殿
病虫害防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病虫害防除所長
(公印省略)

平成26年度農作物病虫害発生予察情報について

平成26年度農作物病虫害発生予報第14号を公表したので送付します。

平成26年度農作物病虫害発生予報第14号

平成27年3月2日
徳島県

I. 果樹
果樹共通

果樹カメムシ類

1) 予報内容

発生時期 平年よりやや早い
発生量 平年より多く(前年並), 発生程度は「中～多」

2) 予報の根拠

(1) 本年度(2014年度)の上板町および勝浦町における予察灯誘殺数は, 9月1半旬までは平年より高め
に推移したが, 9月2半旬以降はほぼ平年並で推移した(図1, 2)。

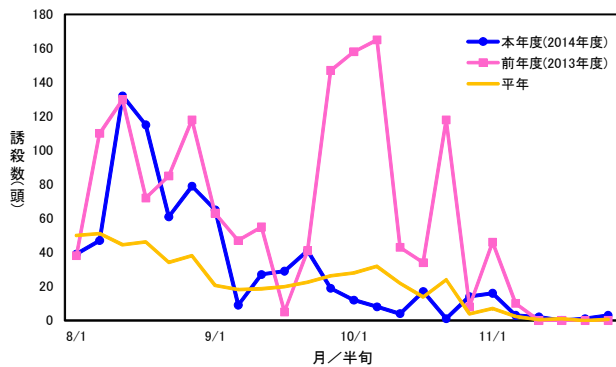


図1 予察灯によるカメムシ(チャバネ+ツヤアオ+クスギ)の誘殺数(上板町)

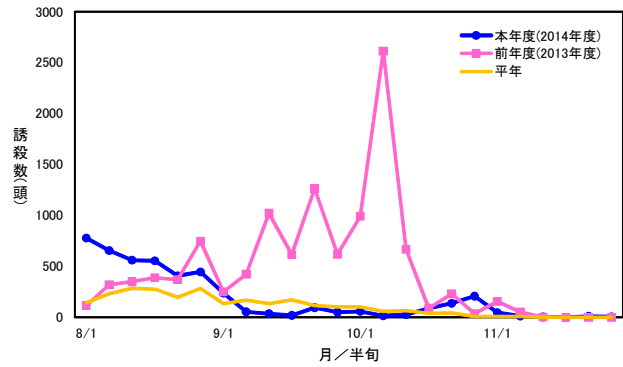


図2 予察灯によるカメムシ(チャバネ+ツヤアオ+クスギ)の誘殺数(勝浦町)

(2) 2月に実施したチャバネアオカメムシの越冬調査(11地点×2か所調査)では, 10地点で越冬を確認, 越冬成虫は 4.4頭/m²であり, 前年(調査地点数は11地点×2か所, 成虫確認地点数は11地点, 越冬成虫数は 6.6頭/m²)並の越冬密度であった。

(3) 2月26日発表の1か月予報では, 天気は数日の周期で変わるが, 平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く, 降水量は平年並か多く, また日照時間は平年並か少ないと予想されている。

II. 野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや多い), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では, 発生圃場率が33.3%, 発病度が 3.7であり, 平年(5.8%, 0.1)と比べてやや高めの発生である。
- (2) 2月26日発表の1か月予報では, 天気は数日の周期で変わるが, 平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く, 降水量は平年並か多く, また日照時間は平年並か少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので, 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には, 暖房機のファンを作動させて, ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので, 肥培管理に注意する。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので, できるだけ早く摘み取って, ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので, 薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。特に, 下葉には丁寧に散布する。
- (5) 病原菌が侵入してからごく短期間で発病するので, 発生を認めたら散布間隔を短縮して, 集中的に薬剤散布を行なう。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が20.1%, 発病度が 2.0)。
- (2) 2月26日発表の1か月予報では, 天気は数日の周期で変わるが, 平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く, 降水量は平年並か多く, また日照時間は平年並か少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので, 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には, 暖房機のファンを作動させて, ハウス内の多湿化を防止する。
- (2) 発病果や花弁などは伝染源になるので, できるだけ早く除去し, ハウス外で処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

葉かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が19.8%, 発病度が 4.1)。
- (2) 2月26日発表の1か月予報では, 天気は数日の周期で変わるが, 平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く, 降水量は平年並か多く, また日照時間は平年並か少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20～25℃の比較的低温で多湿の時に発生しやすいので, 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には, 暖房機のファンを作動させて, ハウス内の多湿化を防止する。

- (2) 肥料切れは病勢の進展を助長するので、肥培管理に注意する。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。
- (5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が55.6%で、ほぼ平年(45.2%)並の発生であるが、寄生葉率は2.2%であり、平年(5.7%)と比べてやや低めの発生である。なお、優占種はオンシツコナジラミである。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬剤が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ナス

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年よりやや多い)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が16.7%、発病果率が0.3%であり、平年(0%、0%)と比べてやや高めの発生である。
- (2) 2月26日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、また日照時間は平年並か少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が11.7%、発病葉率が0.4%)。
- (2) 2月26日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、また日照時間は平年並か少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が66.7%、発病葉率が9.7%であり、平年(61.8%、8.7%)並の発生である。
- (2) 2月26日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、また日照時間は平年並か少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が25℃くらいで多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤が下葉の葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が1.7%、寄生葉率が0.05%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が66.7%で、平年(29.9%)と比べて高めの発生であるが、寄生葉率は2.3%で、ほぼ平年(4.1%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2) 花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう、丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

オンシツコナジラミ

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が16.7%、寄生葉率が1.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が16.7%、寄生葉率が0.3%であり、平年(0%, 0%)と比べてやや高めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春キュウリ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が44.4%、発病葉率が5.6%であり、平年(70.7%, 11.2%)と比べてやや低めの発生である。

(2) 2月26日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、また日照時間は平年並か少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。

(2) 罹病葉は圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。

(3) 同一系統薬剤の連用は耐性菌出現の恐れがあるので避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年よりやや多い)、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

(1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、発病果率が1.8%であり、平年(7.0%, 0.2%)と比べてやや高めの発生である。

(2) 2月26日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、また日照時間は平年並か少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

(2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。

(3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。

(4) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

(5) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

べと病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、発病葉率が7.0%であり、平年(58.3%, 13.2%)と比べてやや低めの発生である。
- (2) 2月26日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、また日照時間は平年並か少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので、肥培管理に注意する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行なう。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年より少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が1.9%、寄生葉率が0.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

オンシツコナジラミ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が1.7%、寄生葉率が0.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。コナジラミ類は葉裏に寄生するので、薬液は葉裏にも充分に付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並)、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が55.6%、寄生葉率が7.4%であり、平年(21.1%, 2.6%)と比べてやや高めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

冬春ハウレンソウ

べと病

1) 予報の内容

発生量 平年よりやや多く(前年より多い)、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が33.3%で、平年(12.0%)と比べてやや高めの発生であるが、発病度は3.5で、平年(3.3)並の発生である。

- (2) 2月26日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、また日照時間は平年並か少ないと予想されており、発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 品種は、本病レース1～10に抵抗性があるものを利用する。
- (2) 葉が繁茂すると被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (3) 春先の病勢の伸展を抑制するため、薬剤は予防的に用いる。
- (4) 薬剤は予防的に、また下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に散布する。
- (5) 罹病株を圃場に放置すると、次作の第一次伝染源となるので、発病株は速やかに処分する。また、春先に萎縮して奇形となった株はべと病に感染しているため、速やかに処分する。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年より多い)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が72.7%で、平年(27.8%)より高めの発生であるが、発生程度指数は4.0で、平年(2.8)並の発生である。
- (2) 2月26日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、また日照時間は平年並か少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているため、薬剤が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春イチゴ

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が11.4%、発病果率が0.6%)。
- (2) 2月26日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、また日照時間は平年並か少ないと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。
- (2) 発病果は伝染源になるので、速やかに圃場から持ち出し処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が3.7%、発病葉率が0.1%、発病果率が0.3%)。
- (2) 2月26日発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べて曇りや雨の日が多いと見込まれている。気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、また日照時間は平年並か少ないと

予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 古葉を早めに除去し、葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (3) 罹病した果実や茎葉などは早期に見つけ、除去した後圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (4) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並)、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が21.4%で、平年(20.8%)並の発生であるが、寄生株率が4.9%で、平年(2.4%)と比べてやや高めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並)、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

- (1) 2月後半の巡回調査では、発生圃場率が85.7%、寄生葉率が9.4%であり、平年(51.3%、7.4%)と比べてやや高めの発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

III. その他

1. 施設栽培において暖房機の最低気温の設定値を下げ過ぎると、低温性病害の発生を著しく助長する恐れがありますので、ご注意下さい。
2. 薬剤の使用に当たっては必ず使用基準を遵守し、周辺作物等へ飛散しないようにして下さい。

発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所
U R L : <http://www.pref.tokushima.jp/tafftsc/t-boujoshou/>

○ 病害虫の発生予察情報、発生状況、防除法等をお知らせしています。